

〈実践報告〉

子どものためのアトリエについての実践と考察

佐藤 有紀

1. はじめに

近年幼児教育の分野では、単なる知識や技術の習得に留まらない子どもたちの創造性や、非認知能力を育む活動が重要視されている。『保育所保育指針』では表現について「自ら様々な表現を楽しみ、～表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」¹⁾とあるように、保育現場での造形活動は、子どもたちの生活経験や遊びの中から生まれ、子どもが主体的に行う活動であることが肝要である。

現在、教育の現場では、子どもたちの自由な表現力や主体的な創造力を育むための試みが様々に行われている。特に幼児の教育機関における日々の生活にアート活動を取り入れた、イタリアの「レージョ・エミリア幼児教育」は世界から注目を集めており、近年では日本の幼児教育現場においてもその実践に影響を受けて、様々な活動が行われている。このレージョ・エミリア市における子どもの主体性を重視する学びの要は、「アトリエ」とそれを運営する「アトリエリスタ（芸術士）」の存在である。

本稿は、このアトリエにおける活動を通じた「学び」の形を、通常の保育生活の中に可能な範囲で、取り入れることを試みた実践の報告である。この幼児（3～5歳児対象）の実践の活動記録から、この活動が、子どもたちの自己肯定感、協調性、探究心といった非認知能力の育成や表現活動においてどのような効果が期待できるのか、また、今後の幼児教育機関におけるアトリエ活動の可能性について考察する。

2. アトリエ・ラボについて

1.) アトリエについて

イタリアのレージョ・エミリア市では、公立教育機関（幼児学校・保育施設）に、「アトリエ」が芸術の専門家（アトリエリスタ）と共に配置され、そこは創造と科学と芸術の空間として様々な道具や素材が設えられている。子どもたちは、その空間（アトリエ）と普段の生活空間を行き来しながら、アトリエリスタとともに、さまざまな「対話」、「活動」、「探求」を行っている²⁾。

2023年、このイタリアのレージョエミリア・アプローチの展覧会「もざいく～描くこと、言葉、素

材が紡ぐ物語～」が日本で開催された。この巡回展は、イタリアのレッジョ・エミリアの子どもたちの描画（ドローイング）と、それがアトリエで生み出される過程や研究が展示されたもので、ここでは実際に素材（画材）とツール（道具）の関係性を探求できる「体験型アトリエ」も設置された。

今回の実践は、この体験型アトリエ（描画活動の探求の場）を参考に、定期的に保育施設内で保育者の協力の下「子どものアトリエ活動」を試みたものである。

2.) 活動内容について

この活動は子どもたちが自発的に自由な創造活動を行うことができる場（研究所）として「アトリエ・ラボ」とし、を以下のように設定した。

調査時期	I. 2023年6月～11月（活動a～e） II. 2024年6月～11月（活動f～i）
時間	時間外（自由）保育の時間 16:30～18:00
対象	豊中ほずみ保育園（3歳～5歳児）15名程度
場所	アトリエの設置場所は、主に4歳児クラスの部屋（開催当日の園の活動に合わせて、移動式アトリエの形態をとる）

活動のテーマは「描画材における探求活動」で子ども描画あそび・探求活動のために、多種多様な描画材や生活素材などを準備し、その活動の様子を観察、記録する。活動で扱う主なものは以下である。

I. 様々な画材・素材による描画あそび（活動a～e）	
描画材 （ツール）	・ 各種様々な色鉛筆・パステル・水性ペン・クレヨン・顔料 溶剤として水・ボンド・せんたくのり（PVA）
素材 （支持体）	・ 紙類（画用紙・包装紙・梱包材・厚紙・段ボール・和紙） ・ その他（壁紙、透明フィルムなど）
II. 描画素材についての探求・造形あそび（活動f～i）	
描画材 （ツール）	・ ダストレスチョーク（原材料ホタテ貝） 溶剤として 水・せんたくのり（PVA）・シャボン玉液・木工用ボンド
素材 （支持体）	・ 紙類（和紙・障子紙）、透明フィルムなど

3.) 活動環境について

園内にアトリエ専用の空間を常備することはできないため、園の活動に合わせた空きスペースに人数分の作業台や棚を設置する、「移動式アトリエ」の形態をとることになった。このアトリエ空間では通常の用具の他、園児を創造活動へ誘う魅力的な資材として、特殊な画材や生活素材などを準備し、子どもたちの創作意欲が高まるような配置を心掛ける。そして各人の活動を尊重できる環境を確保するため、毎回参加人数を15人程度に制限した。

3. 「アトリエ・ラボ」活動の実践

1). 実践Ⅰ. 様々な画材・素材による描画あそび（活動 a.~e.）

実践Ⅰでは、参加する園児がこのアトリエスペースに設置した素材を用いて、自由に描画あそびを行う様子を観察し、その様子や要望に応じて、様々な道具や素材を加えていく。以下はその活動の記録である。

活動 a.

初回は活動を始めるにあたり、参加する園児に、このアトリエ・ラボが「自由に素材・画材を探求する場所である」ということを説明した。子どもたちは整然と配置した画材や素材を前に、とまどう様子を見せながらも、様々な画材で色ぬりを試みるなど、慎重に活動を始めた（図 a-1,2,3）。そして、多色の描画ツールを使い、色の変化を発見したり、壁紙などの独特な紙素材の質感を生かした「お絵描き」をししたりして様々な描画あそびを楽しむ姿が見られた（図 a-4,5,6）。

2023年6月7日					
a.)様々な紙素材・描画素材（素材との出会い）					
丸い紙を繰取る	虹のイメージ	模様で埋めていく	透明素材を重ねてみる	模様・記号を描く	段ボールの模様から
					
丸い紙と水性ペン (a-1)	段ボールと水性ペン (a-2)	段ボール・水彩絵の具 (a-3)	透明フィルム・水彩絵の具 (a-4)	壁紙・水性ペン (a-5)	段ボール・水彩絵の具 (b-6)


(図 a)

活動 b.

前回、子どもたちが各種画材を水で溶かすことに興味を示したため、水入りスプレーを道具として加えると描画材の変化を楽しみ、混色あそびをする様子が見られた（図 b-1,2,3）。また、長方形の段ボールを「衝立状にする」、「繋ぐ」など、素材自体の形状を生かした画面に描きながらイメージを広げていく様子が見られた（図 b-3,4,5,6）。









このように、次第に子どもたちは自分なりに素材の使い方を工夫することを楽しみ、それ

によって変化する事象に興味を示すようになった。

2023年6月19日					
b.)様々な紙素材・描画素材 (展開)					
イメージを描く	色を重ねる	長い紙を使って	イメージの拡大	人を描く	物語がうまれる
					
段ボール+水彩えのぐ (b-1)	絵の具+パステル (b-2)	段ボール+水彩えのぐ (b-3)	段ボール+水彩えのぐ (b-4)	段ボール+水彩えのぐ (b-5)	様々な素材 (b-6)

(図 b)

活動 c.

2023年10月16日・10月23日					
c.)様々な紙素材・描画素材 (継続)					
顔・ものがたり	イメージの蓄積	組み合わせる	ハサミで切りぬぎ	綴じる	本にする
					
パステル・白画用紙 (c-1)	パステル・包装紙・画用紙(c-2)	色鉛筆・波板シート・画用紙(c-3)	色鉛筆・様々な紙素材・段ボール(c-4)	紙素材・麻紐・穴あけパンチ(c-5)	紙素材・麻紐・穴あけパンチ(c-6)
					

(図 c)

アトリエ・ラボの活動の回が重なるにつれ、子ども同士の対話が増え、描かれるものに連続したイメージやストーリー性が表現される傾向が見られた (図 c-1,2,3)。そこで、各自の活動の跡を継続した形で残すために、簡易な方法で綴じていくことを提案した (図 c-5,6)。そしてこれにより、アトリエ・ラボの活動が単発のものではなく、子どもたちの意識の中でも継続した造形活動として次回の活動に繋がることを期待した。

活動 d.

前回までの画材の探求を更に展開するために、新たな溶剤としてせんたくのり (PVA) と木工用ボンドを加えた。子どもたちは、それらの素材の感触を楽しみ、画材と組み合わせて様々な描画あそびを試みた (d-1,2,3)。





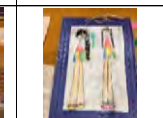
また、これら素材を探求する活動とは別に、友達との対話を通して共通のキャラクターアイテムを制作し遊ぶ様子も見られた (図 d-4,5,6)。どの活動においても子どもたちの協働する場面が以前より多く見られるようになった。

2023年11月6日					
d.)様々な紙素材・描画素材(展開)					
素材選び	透明素材を使って	水を加える	対話しながら	対話からの描画	素材であそびこむ
					
様々な素材・描画材 (d-1)	木工用ボンドを加える (d-2)	霧吹きスプレー (d-3)	様々な素材 (d-4)	様々な素材 (d-5)	様々な素材と素材の作品 (d-6)

(図 d)

活動 e.

これまでの活動で、子どもたちはアトリエにある描画材や素材を組み合わせ、偶然に現れるイメージを発見し、様々な方法で描画材の「探求」を行ってきた(図 e-1,2)。この回は、改めて「絵を描く」活動に焦点を当て、「絵画」の空間を意識しやすいフレーム(額)の模様が印刷してある用紙を加えてみた。するとこの用紙は子どもたちの関心を引き、その枠の内側に沢山のイメージが描かれた。このことから、描画あそびにおける支持体としての素材は、描かれるイメージと深い繋がりがあることが改めて示された(図 e-3,4,5)。

11月27日					
e.)様々な紙素材・描画素材(額・フレームを使う)					
パステルで描く	描画材に融合素材を加える		フレームを使用する	並べて鑑賞する	具体的なイメージ
					
パステル・クレヨン (e-1)	せんたくりのPVA・パステル・色鉛筆 (e-2)		フレーム模様の紙 (e-3)	フレーム模様の紙・描画材(e-4)	フレーム模様の紙・描画材(e-5)

(図 e)

以上、「アトリエ・ラボ」の実践 I (a.~e.) では、参加した園児が回を重ねるごとに描画材(ツール)や素材に積極的に関わるようになり、様々な「描画活動」を自発的に行う様子が見られるようになった。活動において、その場にいる大人は子どもの活動を尊重し、できるだけ子どもの発案に応じて適宜必要なものを加えていくようにした。通常、描画活動にあまり自信のない子どもは、慣れるまで大人(筆者や保育士)に活動に対する意見や承認を求めていたが、このアトリエ空間が「自由に活動していい場所である」という認識が定着すると、自分の作業に安心して取り組むようになった。

子どもたちは初めて出会う、様々な異素材の組み合わせによる想定外の感覚を楽しみ、周囲との対話や新たな発見から表現活動を広げていく様子が見られた。

2.) 実践Ⅱ. 描画素材についての探求・造形あそび（活動 f. ～ i.）

実践Ⅱでは、「素材」そのものの「探求」を試みる活動に重点を置く。ここでは特に身近な生活素材を描画素材として扱うことをテーマとした。

活動 f.

この活動は、固形のチョークと市販のシャボン玉液で、色の泡あそびの実験を行いながら、描画素材の探求を行うものである。

まず活動に参加する園児にシャボン玉液で色の泡の作り方を説明する。まず、色素としての固形の色チョークを削り粉末状にする。そして透明カップに入れ、そこにシャボン玉液を注ぎストローで膨らませて泡を作る（図 f-1,2）。この活動は各作業過程で、チョーク素材が分解され変化の様子が分かりやすい。子どもたちはチョークの色の重なりを観察し、混色を楽しみながらシャボン玉液づくりの作業に没頭した。


次に、このシャボン玉液を膨らませ、その色の泡をカップから吹きこぼし、画用紙を敷いたテーブル上で色の泡あそびを試みる（図 f-3）。チョークとシャボン玉液の調合は慣れるまで時間がかかるが、子どもたちは自分たちで周囲と協力しながら試行錯誤を繰り返し、大量の泡作りに没頭していた。

2024年 6月25日		
f.)描画材の探求（素材の分解・シャボン玉液の泡あそび）		
シャボン玉液にチョークを溶かす	ストローで空気を入れる	色の泡を紙にうつす
		
プラカップ・ストロー・チョーク・シャボン玉液・網 (f-1)	プラカップ・ストロー・チョーク・シャボン玉液・網 (f-2)	障子紙 (f-3)

(図 f)

活動 g.

前回の活動では、色の素として固形の色チョークを網で擦り下ろし分解したが、その「擦る」という作業は子どもたちの活動に対する意欲を更に高めた。そこで今回は、泡の探求に既成のシャボン玉液ではなく固形石鹸を使用することにした（図 g-1）。

2024年 7月9日			
g.)描画材の探求(シャボン玉液を石鹸でつくる・泡あそび)			
固形石鹸を網で削る	水を加え振る	泡に着色	ストローで膨らます・描画あそび
			
プラカップ・固形石鹸・網 (g-1)	ビニル袋・水・石鹸の粉 (g-2)	プラカップ・網・チョーク (g-3)	ストロー・着色泡入りプラカップ・障子紙 (g-4)

(図 g)

子どものためのアトリエについての実践と考察

石鹼とチョークの粉、水、というシンプルな材料であるが、子どもたちは固形石鹼やチョークを擦り下ろす作業を楽しみ、納得のいく泡を作るための材料の調合、混色など試行錯誤を重ねていた。また、この活動では特に異年齢の子どもたち同士での協働作業が見られた（図 g-2,3,4）。

活動 h.

前回までの活動で子どもたちは「泡の探求」を熱心に行い、自分の好きな色の泡を大量に作ることができるようになった（図 h-1）。

この泡探求の痕跡を残す試みとして、泡のかたちを和紙に写し取ることを提案してみたが、この活動は子どもたちの興味を引かず、子どもたちは延々と泡づくりに取り組んだ。







2024年 7月23日					
h.)描画材の探求(泡あそびの展開・泡うつし)					
好きな色の泡をつくる		泡を和紙で写し取る		泡で描画あそび	
					
ブラカップ・固形石鹼・網・ストロー (h-1)		ストロー・着色泡入りブラカップ・和紙 (h-2)		あそびの跡 撮影：筆者 (h-3) あそびの跡 撮影：園児 (h-4)	

(図 h)

活動 i.

長期間、泡をつくる活動が続いたため、同じ原材料を用いて、透明素材を使う描画遊びを提案した（図 i-1）。

この活動は、その描画あそびの跡を版画のように紙に写し取ってみようという試みであったが、子どもたちはこの活動にあまり関心を示さなかった。そして溶剤と画材を混ぜ合わせた物質を泡立て、泡の探求を引き続き試みている様子が見られた（図 i-2）。

9月10日					
i.)描画材の探求(透明素材を使用した描画あそびの展開)					
透明素材とチョークで描画・版画あそび			描画あそびから泡あそびへ		
					
透明フィルム・チョークの粉・せんたくりPVA・和紙 (i-1)			透明フィルム・チョークの粉・せんたくりPVA・ブラカップ・ストロー・チョークの粉 (i-2)		

(図 i)

以上、実践Ⅱでは「素材そのものを探求する」というテーマに基づいて、子どもたち終始、「素材を分解して泡立てる研究」に取り組んだ。

アトリエ・ラボでの活動の目的は「作品制作」ではなく、「その造形活動から生まれる発見や学び」としているが、活動を見守る立場としては造形活動の成果を「実体」として目に見え、触れることのできる形に残したい。という想いが出てくる。そこで各回、活動の展開として作品作りへの誘導を試みるが、子どもたちはその活動には興味を示さなかった。このことから、子どもたちの自発的な探求を行う姿を捉えるには作品としての成果よりも「活動の記録」が重要であるということが改めて分かった。

実践Ⅱでは、園内でアトリエの活動内容を共有するために、活動の痕跡を残すもの（テーブルに敷いたロール紙、実験素材、道具などを園内に展示した。活動の素材や内容は園の日常の造形活動に引き継がれ、アトリエ・ラボに参加できない子どもたちと共に、新たな活動として展開されるようになった。

4. アトリエ・ラボのまとめ

この『アトリエ・ラボ』は、子どもたちと日常を共にしている現場の保育者の「もっと子どもたちが自分で遊びを考えていく力、工夫する力を養いたい」という想いをきっかけに、園の決められたカリキュラム外で「子どもたちが主体的に自由に創造できる空間」として設置を試みたものである。

今回の実践全体を振り返るにあたって、アトリエ・ラボの運営に関わっていただいた園の職員の方々からは、次のような意見をいただいた。

(子どもたちについて)

「造形活動の中での素材の扱いが変化し、徐々に自分たちの自由な発想をもとに活動することが浸透してきている。」

「以前は色が濁ることを失敗、と捉えていたようなことが、活動を重ねることによって様々なものの見方、効果についての視野が広がり、活動の幅が広がっている。」

(園全体について)

「職員間でも生活素材を造形素材と捉える意識が高まり、新しい教材を試すことが盛んになった。」

「アトリエ・ラボに関心をもつ職員も増え、遊びこみから造形活動に繋げる活動が活発に行われるようになった。」

これらの意見からは、アトリエ・ラボの活動に参加していない園児や園の関係者にも実践の内容が広がり、日常の保育の現場の活動に活かされていることが窺えた。そして、アトリエにおける素材そのものに関わる造形あそびが、園児に自己肯定感を与え、創造意欲を高める一助となっていることが分かった。このことから、保育施設の限られた時間と空間においても、「造形活動の研究の場」としての「アトリエ」という空間を作ることが可能であることが分かった。

5. 考察・今後の課題

「芸術は遊びである」 J・デューイは著書『経験としての芸術』で次のように述べている。「子どもが遊びに夢中になっているのをよく観察すると、人はきつと戯れ（playfulness）が真剣さと完全に融合していることに気づくであろう」³⁾ 今回のアトリエ・ラボの活動、特に活動Ⅱでは、子どもたちは時間を忘れて「泡遊び」に熱中していた。しかし、それは単なる「遊び」ではなく、その行為を通して素材の「探求」に没頭する「遊びこみ」へと展開していた。

「芸術の自発性は、何かに [=仕事に] 対してやろうとする自発性ではない。そうではなく制作活動の秩序ある展開に完全に没頭することである。この没頭こそは美的経験の特質である」³⁾。

デューイのこの言葉のように、子どもの造形活動における重要なことは、「活動そのものに没頭するという美的経験」の中で学び発見することである。ということがわかる。また、表現活動における美的な感覚についてアトリエリストのV・ヴェッキは次のように述べている。

「もしも美学が、感性と遠く離れたもの同士をも結びつける能力や、異なる要素間の新たな結びつきにより学びを育むのであれば、美学は学びの重要な要素となります」⁵⁾ 子どもの造形活動におけるこの「美的経験」による学びの意味を掘り下げるには、その活動観察の記録を蓄積し、第三者とそれを共有、分析することが不可欠である。今回の実践での一番の反省点は、園児個人の活動について、十分に記録に残すことができなかったことである。子どもの活動の意図を可視化し、その内容を保育全体の活動へと繋げていくには更なる工夫が必要である。

今後は更に、子どもたちの活動の様子やそこで語られる言葉から、そこで行われている表現の意味を掘り下げることに留意したい。そして、それらの活動を継続して行い、様々な意見を交換しながら、子どもと大人の「協働研究」の場としてのアトリエ空間を作っていきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省. (2017). 『保育所保育指針（平成 29 年告示）』. 株式会社フレーベル館. p30.
- 2) 森 真理. (2013). 『レッジョ・エミリアからのおくりもの』. フレーベル館. pp40-41.
- 3) J・デューイ 訳者 栗田 修. (2010). 『経験としての芸術』. 株) 晃洋書房. pp347-350.

- 4) ヴェア・ヴェッキ, (2025). 『レッジョ・エミリアのアートと創造性』. 北大路書房 p12.

参考文献

- ・佐藤学 ワタリウム美術館 (2011) 『驚くべき学びの世界レッジョ・エミリアの幼児教育』. 株) ACCES.
- ・ヴェア・ヴェッキ, ミレツラ・ルオツツイ編, カンチエーミ潤子, 山岸日登美 訳 (2023) 『もざいく〜描くこと、言葉、素材が紡ぐ物語〜』. 中央法規出版.

謝辞

本研究につきましては、豊中ほずみ保育園の教職員の皆様には、ご多忙な中でのアトリエ活動の実践にご協力いただき、深く感謝申し上げます。